

宮城県の考古学事始め

藤 沼 邦 彦

『宮城県考古学』の創刊号が出るという。伊東信雄先生がお元気だったら大喜びしたことであろう。宮城県考古学会は東北地方の県考古学会としては最も遅れて誕生した。遅れたついでにあせらず、のんびりと成長してほしい。会誌にのる論文も分かりやすいものがよい。いろんな人が投稿し、好奇心の玉手箱のような生き活きとした会誌に育ったら嬉しい。

宮城県の考古学が最も華やかだったのは、理学部に松本彦七郎、医学部に長谷部言人・山内清男、法文学部に喜田貞吉など、錚々たるメンバーが東北大学に集まった大正中頃から昭和初期の時代であろう。とく松本が里浜貝塚を層位学的に発掘して土器型式を設定し、その新旧関係をあきらかにする方法を考古学に導入したこと、そして松本の影響を受けた山内が東北地方各地の貝塚を発掘して縄文土器の編年的研究の基礎を作ったこと、さらに山内が縄文の謎を解き明かしたこと、この三つは仙台を舞台としてなされた日本考古学史に輝く業績であった。でも、宮城県の考古学が大学の研究者からいきなり始まった訳ではない。すでに数多くの郷土の先輩がいろいろな形で「考古学事始め」をしていたのだ。

〔縄文人の考古学者〕大学の三年生になった昭和40年の春、一迫山王遺跡の発掘に参加していた時、縄文時代晩期の層からドングリ状の木の実がまとまって出土し、その傍らに縄文時代中期の土器片が一個あった。「どうして晩期の層から中期の土器片がでるだろう」と不思議に思ったら、伊東信雄先生曰く「君、ここに考古学者が住んでいたのだよ」。するとそばにいた桑原先輩が「それで貧乏してドングリばかり食べていたのですね」。純真な私は「山王遺跡には考古学を研究している縄文人がいて、貧乏なためドングリしか食べなかったのだ」と本気に思い込みそうになった。それ以来、遺跡を掘っている時にその地層や遺構の年代より古い遺物が混じって出てくると、山王遺跡での伊東先生の冗談を思い出す。でも縄文人を学史に登場させるわけにはいかない。

〔佐久間洞巖と新井白石〕宮城県で考古学的な遺物や遺跡などを記録する人々が登場するのは江戸時代からである。そのトップバッターは『奥羽観蹟聞老志』を編纂した佐久間洞巖であろう。『聞老志』は、考古学関係の記事として、新地貝塚（福島県新地町）にまつわる手長明神の伝説や領内二箇所（石鏃）が出土することを取り上げている。洞巖は宮城郡の白石館腰出土の石鏃を幾つか手に入れたようで、親交のあった江戸に住む新井白石に三

個送った。「白石で石鏃を拾ったので白石さんに上げますよ」という訳だ。受け取った新井白石は、幕府を代表する学者である。まじめに「石鏃は、肅慎が東奥などで勢力をふるっていた時の武器で、土中に埋もれたものが強い雷雨で地面に洗い出されたものです」と答えている。白石の有名な石鏃人工説はもしかすると洞巖のシャレから生まれたものかもしれない。

〔宮城県考古学のパイオニア〕 縄文時代の遺跡や遺物が学問の対象となるのは、江戸時代にその萌しがあるにせよ、やはり明治時代に入ってからのこと。明治10年にはモースが東京の大森貝塚を発掘、明治17年には若き坪井正五郎を発起人として人類学会が誕生、明治19年から機関紙「人類学会報告」（のち「東京人類雑学雑誌」などに改称）が発行された。この機関紙は地方の人々の研究発表や資料報告の受け皿として大いに利用され、学問の底辺を広げることに大変貢献した。宮城県人でこの『東京人類学雑誌』に最初に投稿するのは黒川郡大衡の布施千造で、明治20年代から30年代にかけてのことである。布施は黒川郡の石器時代の遺跡を調査し、出土品の図を添えて報告している。色麻町の伊達神社が鎮座する社地は実は埴輪をもつ大古墳（御山古墳）であると気づいたのも布施であり、その頂上から蝦夷塚（色麻古墳群）が累々と並んで見えたと報告している。また民俗学的な分野も研究するなど幅広い活動を行った人であった。布施こそ宮城県における考古学の草分け的存在であったと評価してよいであろう。しかし、彼の業績が郷土の人々にどのように受け継がれるのか分からない。

明治40年になると「仙台考古会」（大正7年の第50回例会まで続く）が山中樵・高野松次郎・常磐雄五郎の三人によって結成された。例会では主として歴史時代の資料をもち寄って研究会が行われたようである。また、この頃になると縄文時代の遺跡を継続的に発掘して遺物をおつめ、研究しようとする人々があらわれる。石巻の遠藤源七と毛利聰七郎は共同で沼津貝塚の発掘し、すぐれた鹿角製の漁具や装身具、土器・石器を大量に採集した。桃生郡前谷地の斎藤養之助は、父が呼んだ坪井正五郎の話に影響され、宝ヶ峯遺跡を発掘し、土偶や人面土器など多数の遺物を得た。この二つの発掘は昭和の初めまで続けられ、東北大学の研究者が参加することもあった。集められた資料は多数の研究者によって数多くの論文や概説書・図録などに利用された。なお、こうした民間のコレクションは地方の小博物館的な役割も果たしたことを忘れてはならない。西大崎の山口仁道のコレクションも膨大で「鳴子考古陳列所」（昭和6～15年）として公開されたというが、内容を知る手掛かりがつかめていない。こうした埋もれた民間の研究者や遺物蒐集家を発掘し、研究面だけでなく考古学の普及や文化財保護に尽くした面からも評価し、顕彰するのも地域の考古学会の大きな仕事の一つと考えている。（敬称略）